

◆藤井 茂 (75歳) 南島での栄養失調

戦場・軍隊 ●

私は二・二六事件の翌日（昭和十一年二月二十七日）あの雪深い東京駅を発って満州興安嶺の戦車隊に入隊。翌十二年支那事変勃発するや、北支出動、白耶土湾敵前上陸、海南島攻略、広西省南寧作戦、昭和十五年九月仏領印度支那ハノイ進駐。大東亜戦争でラバウル、ニューギニアと経てウェーキ島で終戦。十月帰国まで九年七ヶ月御奉公した者です。

その間北支戦線では前車の戦車長が爆死。広東攻略の時には私の操縦手が左腕貫通銃創、ラバウルからウェーキ島に転進する際にはトラック島附近で敵潜水艦の攻撃を受け輸送船は轟沈^{こうせんと}。戦車の無い戦車隊としてウェーキ島に上陸しました。ウェーキ島は（別紙地図参照）我が戦線では東端に在り、米国の中央ルート（米本土——ハワイ——ミッドウェー——ウェーキ島——グアム——フィリッピン）の重要地点で、昭和十六年十二月二十三日海軍の陸戦隊により攻略占領した島で全長四キロ幅百メートルの馬蹄形の珊瑚礁の島です。

昭和十八年十月六日、払暁^{よつぎょう}電波探知機の死角を縫って我

が飛行場を爆撃。戦闘機十数機は壊滅。砲台はあれど、旧式の砲で射距離もなく、沖に空母を主体とする艦隊が来襲、艦載機と艦砲射撃が間断なく繰り返され、糧秣^{りょうま}倉庫等の地上の建物はことごとく壊滅。我が陸軍は敵の上陸を阻止すべく待機していたのですが、その翌七月に至るもその気配はなく艦載機が低空飛行、機銃掃射は熾烈^{しちれつ}を極めたが我が方も機関銃その他の銃砲により抵抗したため二日間の戦闘を以て敵艦隊は退却しました。終戦後、米軍の話によると艦載機が我が方の銃撃により艦に帰着出来なかった機が相当あったのとこのことでした。

米軍は中央ルートを諦め翌十九年二月南方のクエゼリン島、七月には北方のサイパン島を攻略。グアム、フィリッピンと攻略したためウェーキ島は糧秣^{りょうま}を絶たれ減食のやむなきに至りました。朝食は乾パン（二百三十グラム）を四人で一袋（一人一二ほど）金平糖^{こんぺいとう}三個、夜は二十グラムの米（湯呑茶碗一杯の御飯）で、サザエ等の貝類や内海の珊瑚礁に附着した蟹^{かに}等は食べ尽くし荷物等に繁殖した鼠^{ねずみ}なども食いまし

た。渡り鳥が卵を生むのですが、小さな島に三千五百人の口にはほど遠く栄養失調による病死が続出、陸海軍で二千五百人は亡くなりました。遺体の始末が大変で、島にはボサの木とスベリ草が生えていましたが、薪がなく、流木など集めたもので手首だけ切って鉄板で焼いて封筒に入れ、遺骨箱に約二十人分入れて潜水艦が糧秣補給に来た時還送しました。

後の遺体を埋葬するのですが、体力的に余り深くは掘れず遺体を覆う程度で、砂と石で埋めたものです。補給の潜水艦も作業中に敵の哨戒機が来たら艦が危いので、潜水してしまふので、みすみす補給出来ず沈めたことがあります。補給が失敗したからすぐ代わりの便船という余裕がなく食い延ばしせざるを得なかったのです。

終戦前の七月、病院船高砂丸が来て七百人余を送りましたが、正直言ってその兵隊を船に届けて島に帰る時、あるだけの食糧を食べ尽くしたら島の土になるのかと思うと、涙が出ました。終戦が早くて助かったと思いました。

制空権も制海権も敵に取られていた現状で、在島の人員を減らして多少の糧秣を輸送すれば我々も増食が出来て一石二鳥と思っただけですが来る途中、敵の臨検に会って予想以上の糧秣があるので封印されたそうで、我々は落胆しました。

でも乗組員の糧秣を分けてくれました。「人事を尽して天命を待つ」という諺がありますが、死力を尽くしたので満足しています。内地の方も大変だったでしょうが、土がない砂と石の珊瑚礁で、野菜も育たない。参謀本部で野菜の種を送っ

てくれましたが、煎って食べました。水も雨期（半年間）には毎日スコールがあるのでドラム缶に貯水しますが、乾燥期には雨が一滴も降らず、海水をブリキ缶に沸騰させて、湯気を細いパイプを通して冷やし、蒸留水を作って飲みますが、余り飲むと下痢します。下痢したら体力がない（平均私らの体で四十キロ）ので赤痢になります。

気候は、直射日光は暑いのですが、内地の六月ごろの気候で、太平洋の孤島ですから湿気がなく過ごしやすい所です。食料と水があれば極楽地だと思います。現在、生還者は北海道から九州まで三百人いますが、毎年会合して慰霊祭を催して生きている貴さを喜び合います。

現在の食料事情を顧みると主食はもちろん、野菜、魚まで輸入に頼らざるを得ない状態ですが、万一その輸送が絶えたらどうなるか、自給自足出来ない現状ではなはだ寒心に堪えないことだと思えます。人として最低の生活にたえて来た私共にとって関心のあることです。

附記 戦後政府主催の遺骨収集団に依り遺骨の収集後慰霊碑も建立されました。

◆細野和嘉夫（69歳） 出征の記

戦場・軍隊 ●

思えば昭和十六年八月私は国民の義務である徴兵検査を受ける事を誇りと思っていた。その年は大東亜戦争の始まった年だ。明けて一月三十日部落の多勢の皆さんの歓呼の声に、また万歳に旗幟きさしを押立て駅まで見送られ征途に着いた。駅には各部落から多くの出征兵士が大勢集まっていた。その日は軍関係者に引率され、小石川の旅館に一泊した。二月一日東京赤坂検町近衛歩兵けんたふ聯隊に入営した。当日の入隊者の初年兵は約千二百余名であった。

二月六日、永久の別れになるかも知れない面会日だった。増上寺のまわりは今と違って、一帯は小山の雑木林だった。面会場所は現在の野球場またはボーリング場の近辺だった。私は手紙の行き違いで家族が見えず誠に残念だった。同郷の面会者の方に大変お世話になった。皆最後の別れを惜しむ。生きて再び会える事を願い、翌日品川駅より一路南下した列車は、軍の機密保持のために窓は鏡戸を落し外の様子は一向にわからず、いつしか下関に到着した。釜山に行く船は移民船のブエノスアイレス丸で赤十字の白マークが付いていた。

乗船前、土地の愛国婦人会入りの襷たすきをかけた皆さんに湯茶の接待を受けありがたかった。また軍楽隊の見送りの演奏にも感激した。岸壁を離れ祖国の山河がかすむ頃、止めどもなく涙が出た。釜山より軍用列車に乗り一路北上、北京を経て数日後の二月十五日早朝、山東省に到着した。長旅で軍靴がはずにまいった。

当地で聯隊けんたふの入営式を行い内地からの千二百余名はそれぞれの各中隊に配属され、みな別れを惜しんでいた。

私の任地は、山深い所で行けども行けども原野ばかりで大陸特有の砂塵さじんが舞い、寒く古参兵の目だけが輝いていた。到着後、中隊長の訓辞があり、中国特有の土の兵舎に入る。その夜は赤飯とカツが出て我々を迎えてくれた。夜中、突然数発の銃声に驚き肝を冷やした。約一時間後、敵は退散した。部屋の明りは灯油で、慣れるまで苦勞した。初年兵教育は日増しに訓練がはげしく、各班で毎夜に助教の気合が飛んでいた。銃には実弾を装填そうてんしての訓練であった。

その後呂南作戦に参加した時、前進をはばむ敵の重機関銃

の一斉攻撃を受けて小隊長の「あの重機を攻撃せよ」の声に物陰より躍り出した。同時に、一斉に射込まれ遮蔽物もなく、前後左右にブスブスと弾がつきささり、鉄兜で頭の入る穴を掘り辛抱した。神よ仏よと願うばかりであった。「退れ退れ」の声にも体を動かす事も出来ず、味方の攻撃を待った。その時の彼等の撃合いはものすごいものであった。しばし一進一退であった。実に恐ろしい戦であった。

討伐中の被服は汗とほこりにまみれ、シラミの巢になっていた。中隊は浙江作戦のため鄞県を後に山東省の上治地区に移動、警備についた。再び部隊は棗莊に転進、一息付た頃再度南方転進の命令が下り十九年三月ごろ列車にて南京徐州を通り、上海に到着、接收した紡績会社の大きな倉庫が仮兵舎であった。毎日敵前上陸、また海上での訓練が続いた。たまにたま外出した時、日本の白エプロンをした御婦人方にお目にかかり一時祖国を思い出し懐かしかった。

数日後、我々楓部隊の軍旗と精鋭三千五百余名は四月十九日第一吉田丸に乗船し、一路南方に向け上海を出航した。十四隻の船団で海軍の護衛が付き速度八ノットはがゆい程の航海。我々の吉田丸は五千四百二十五総トンだった。ちょうど船団がバシー海峡に差しかけたその時、監視の目をくぐり暗闇の海面より敵の魚雷攻撃を受け、一発目が機関部に、続いて二発目がブリッジに命中、船は大爆発を起し船首よりほとんど垂直になり瞬時に沈没した。「グアングアン、ド、ドロン」と耳をつんざく轟音に頭を一撃されたような衝

撃を受けた。昭和十九年四月二十六日午前三時三十六分の事である。一瞬の出来事に記憶を失い、私も船と共に深海に沈み海の藻屑と化す所、一瞬足に触れる物があり無意識の内にその物にしがみ付くと同時にグイーと海面に吊り上がった。付近一帯はガソリンに引火して炎の海だった。私は虫の息で塩水を吐きながら手で夢中で漕ぎ遠ざかった。燃えさかる炎の海に浮き上る戦友、アッチアッチと叫ぶ者、また助けを求めめる者の悲鳴はまさに生き地獄その物であった。ふと我に戻り、あつ助かつたのだと思つた。その命棒は太き一尺長さ二尺ぐらいのウインチの破片だった。暗い海上にうごめく人、時の経つにつれ、皆喧嘩な叫び声か闇の中に飛びかつていった。又棒切一本又は板一枚の命綱も次第に力つき、手を離す戦友など、どうにもならないもどかしい場面だった。当夜は波が高く腸を抉られる地獄のようであった。翌正午頃海軍の駆逐艦朝風に救助された。

心身共に疲労困憊した生存者約八百五十名はマニラに上陸し、海没散華した戦友二千五百五十七名の冥福を祈るばかりだ。生存者はサンヘルナンドで休養と整備をし、再度マニラを出航四日後ハルマヘラ島のガレラに上陸、その間何事もなく安堵した。椰子林に野営し、南国で見る南十字星はとてきれいだ。椰子の実のつゆも実に美味かった。島内を移動中、モロタイ島に転進し、上陸後陣地構築や道路作りの毎日が続いた作業中、野生のバナナ、パイナップルまたパイヤ等、珍味に舌つづみをうった。

数ヶ月後に敵はモロタイ島に上陸する。我々が作った陣地も無駄になった。再びモロタイ島に斬込みの命があり、中隊は薄暮に大発に乗り海岸ぞいに進行途中、夜明けになる頃敵に発見され、岬に一時退避中攻撃を受け、船は爆発炎上、なにより一つ残らなかつた。斬込は不成功で、船は中止となつた。我々はやむなく本部のある山奥へ各隊ごとに毎日歩き続けた。バナナの葉で雨を凌ぎながらの日々で食する物もなく蛇、トカゲ、虫などを取りながら空腹をしのいだ。マラリヤ熱にも悩まされた。敵の飛行機の目を逃れるため、山から山への移動が続いた。

ハルマヘラ島は赤道直下で一年中暑く、春夏秋冬などわからず月日など知るよしもなく、暑さで頭がにぶり物忘れに悩んだ。また南の島には浅瀬が多く、珊瑚礁が見事で熱帯魚が泳ぎ一時目を楽ませてもらった。戦は既に極限状態だったように見えた。このまま戦争が終わればと、ふと思つた事もある。

そんなある日、珍しく敵の飛行機が上空に飛来、また爆撃かと思つた。突然拡声器から、「日本の兵隊さん戦争は終りました山から出て来なさい。お国で親兄弟が待ってます」という声が聞こえた。皆、謀略だ、山から出るなと口々に言つた。またピラをまき、一同夢中でそれを読んだ。二、三日後本部より日本は降伏したとの伝達に皆顔を見合せくやし涙がまた、声を立て男泣きする者。かろうじて生を得てきた我々にとつて何とも言われぬ複雑な思いであつた。今後どうなる

か、とらわれの身、帰国の保障もなく、テマだけが飛んだ。部隊は武装解除され丸腰にされた。数日後我々はトベロ地区に移動させられた。途中、空腹にたえられず草根木皮を咬みながら移動した。

トベロでは初めに食糧作りに専念した。この芋作りによつて、帰国まで生命をつないだ。

二十一年五月ごろ内地に帰れるという情報があり、皆歓声をあげた。祖国に再び帰れるなど夢のようであつた。各隊続々山から港に集結した。沖合に米軍の輸送船が見えた時は涙が自然に出た。航海も十一日目、祖国がわずかに見えた時、甲板上に出て皆歓喜して泣いていた。二十一年六月六日、ついに祖国日本に帰れたのだ。

上陸後看護婦さんに頭が白くなる程DDTをかけられ、復員手続き完了後、兄の無事を祈り、復員列車は故郷へと走つた。大陸に、南方戦線に、多く戦友が散華された。十七年に入営の六十余名の同年兵も二十名足らずしか祖国に帰れなかつた。今日生き残つた者は戦争の苦しみ、虚しさを語り続ける事だろう。以上は私の戦争体験である。



◆前沢 勝吉（74歳）

マラリヤと栄養失調

戦場・軍隊 ●

思いおこせば支那事変と引き続き大東亜戦争に参加して今健在でいることが夢のようです。悲惨な体験を知らせようとしても戦争を知らない世代の人々は聞く耳を持たないのでないでしょうか。戦争の源は思想の間違いと思います。二度と悲惨な戦争は、後世の日本国民のために平和な住み良い世の中にならしたいと思います。

私の体験としては、昭和十二年一月吉日横須賀海兵団に入団、新兵教育を終え軍艦陸奥に上艦、第一艦隊旗艦として支那事変では敵前上陸に参加し、駆逐艦羽風で揚子江警備―北海警備でカムチャッカへ、―大東亜戦争に突入、真珠湾戦に軍艦比叡で参加、珊瑚海海戦、ミッドウェーの海戦、インド洋海戦、ガダルカナル海戦で艦がやられてから上艦する船がなく第一防空隊員としてラバウル到着。ラバウルの港に入港しようとした時、敵の爆撃にあい、なけなしの兵器や食糧を積んだ我が船がやられそうになりましたが、無事入港が出来ました。その夜から毎夜地上からの探照灯、地上砲火で、隅田川で見る花火以上でした。おそろしいのは味方の打つ地上

砲火の弾片でした。山本五十六が前線視察の途次、戦死した後、ソロモン諸島へ移動の命を受け、その時から生きて帰れるとはもともと思ってもいませんでした。

ラバウルを出てから十日ぐらいして、ソロモン諸島の中のショートランド島のポポラング島に着きました。その夜敵の艦砲射撃を受橋しましたが、被害も少なく無事でした。ようやく島の頂上に陣地を築くため道を切りひらき、ジャングルを切りひらき、海が見えなかったのが丸坊主になり、四方の海が見えるようになりました。間も無く食糧も無くなり、衣服もすきなたばこも色々な葉をすって、気をまぎらわせ、さつまいもを植えたけれど、葉はよく茂るがいは小指ぐらいしか大きくなりませんでした。いもの葉をすすするほかにおなかすいても方法がなく、夜もねむれず体もやせおとろえ、その上マラリヤに、戦友が一人、二人とたおれ毎日のように病死者が出ました。砂糖が無くて塩分が無ければ生きられないため、海水をドラム缶でたい塩取り作業で取ることになりました。米も味噌も何もかも、最初横須賀から出港してから

は補給がありませんでした。通信もできず米など二年ぐらい食へませんでした。マラリヤでたおれても薬もなく何人死んだか、死んで火葬どころか土葬もままならぬ状態でした。軍艦比叡がガタルカナル島沖でやられてからの年譜

17・12・5 第一防空隊編成七個小隊隊員総数三百五十余

り装備八サイチ高角砲六門付随したもの

17・12・20 浮島丸(三千トン)で横須賀港を出港

17・12・30 ラバウル到着即刻陸揚げ

18・1・7 陣地構築開始

18・4・16 連合艦隊司令長官山本五十六大将第一防視察

18・6・25 ショートランド島の先端ポポラング島に進出

高角砲二門兵員百名ブカ島へ派遣

18・6・30 小雨の中艦射撃を受けるも被害なし

18・7 海拔百メートルポポラング島台地西側に陣地構築

戦死者第一号(白濱兵長)を出す

18・7

18・9 軍需物資の輸送一切途絶する

敵機の銃撃爆撃はげしくなる

18・12・28 三番砲に直撃弾を受け砲員八名、設営隊員二

名、機銃員二名、合計十二名戦死。栄養失

調、マラリヤ、アメーバ赤痢患者続出し、糧

食、医薬品無くなる。

ここまでが隊の記録ですが、これからが、ブイン島に撤退して映画(聞けわだつみの声)で見た以上のジャングルの中

の生活でまた最前線へ。進出先で終戦、捕虜になり、身体は栄養失調になりマラリヤで苦しみました。水の有難さを一番感じました。戦争は無理の連続です。二度と悲惨な戦争にまき込まれないよう、武器を持たない国にしたいものです。



隊伍を組んで学徒出陣

(港区教育史資料)

◆松浦 英夫（68歳）

私は戦艦大和を見た

戦場・軍隊 ●

吉田満氏の著書によれば、戦艦大和が最後の連合艦隊の旗艦として日本国土を離れて、出撃していったのは昭和二十年四月六日の午後四時という事であるが、世界一の不沈戦艦と言われたこの「大和」を私が偶然に見る機会を得たのは、同日の午前六時から七時頃であったかと思われる。当時一部の関係者は別として、これから申し述べるように、通りすがりの海の上で「大和」である事も知らず、その崇高なる英姿を眼の当りにして衝撃的な驚きに打たれた人間も、今となっては数少ない事かと考え、ここにあって書き止どめさせて頂く事とした。

昭和十八年十二月学徒出陣で、学窓の途中で学友と等しく出征し、私は山口県柳井市郊外の陸軍船舶兵部隊に、いわゆる星一つの初年兵として入隊した。六ヶ月間は船舶兵として上陸用舟艇による訓練を受け、冬の海にもつかった。その間に上官からの勧めもあって受験した経理部幹部候補生に合格し、昭和十九年七月には部隊同期の七名と、東京小金井にあった陸軍経理学校に入校した。後で知った事であるが、部隊

本科に残った者の中には、四国にあった特攻基地に渡り、高速ボートの先端に爆弾を装着して、敵艦船に体当たりする訓練に参加した方もおられたという事であった。

経理学校では六ヶ月間の主計官教育を受け、十二月卒業と同時に主計見習士官となって、同期生と共にそれぞれの部署に配属された。私は航空本部の経理部に赴任し、他の同期生五名と共に一ヶ月間の教育を受けた。専任の指導将校は五島昇中尉であり、後日判明する事となるのは、同氏が終戦後東急グループの総帥となり、日本商工会議所会頭を務められた事である。当時の航空本部は市ヶ谷台上の陸軍省の建物の中にあつた。

さて、私は昭和二十年一月には航空本部大阪出張所に異動し、更には徴用による作業隊員百名を引率して、二月十一日に山口県三田尻駅に到着、防府市の飛行場に赴任していた。

同飛行場は「キの八四式戦闘機」の特攻基地となっていた。大工・土工・左官等種々職能を持っている百名の特別作業隊の任務は、敵機の空襲からの守りのため、山側に大きな

穴を掘ってレールを引き、飛行機をこれに入れて遮蔽しやひする事であった。作業が進められているそばで、各自出身を示す襟元に白や赤や青のマフラーをひるがえして、飛行服に身を包んだ特攻隊の人達の日を追って激しくなる出撃がくりかえされていた。元より帰らぬ出撃である。我々はただ、帽を振って見送るばかりであった。

私は作業隊百人分の衣食住にかかわる事柄を支障なきよう整備する事が任務であったが、当初準備されていた食糧も底をついて来たので、上司からも広島糧りょう抹ちり廠しやうに折衝してもらって、まずは食料の確保に広島市に向く事にした。百人分の数ヶ月間の食糧を広島から防府まで空襲下に運ぶ事も容易ではなかったが、広島宇品港にて機帆船きはんせん一隻をやっと見つけこれに積込み持ち帰る事とした。戦争最中の人手不足は極まっております、この機帆船はお爺さんと孫との二人で操船する状態となっていたが、空襲を避ける事と潮待ちのため、夜半燈火管制をして出港した。夜通し私は舳先しんせんに立って、無事食糧を持ち帰られるよう祈った。三田尻港に近づくにつれ、朝霧あさぎりの中に十五、六隻の艦船が集まっており、真中にどっしりとともうもない大きさの軍艦が艦側くわんがわから見受けられた。お爺さん船長にあって、あの一番大きな船の横を通ってくれと頼んで近づいて行った。艦の船尾から船首に向かって横一列に船が並んだ時は、数十メートルの近さとなっていたが、後で分った三百六十メートル余の長さをゆっくりした速度で眺めた時の驚き以上の不思議な思いは、言葉では表現出来ないもの

であった。この軍艦は何であろうか。一般国民はこんな軍艦が何時造られ、存在している事さえ知らなかった。

艦上ではまだ十代の少年とおぼしき人達が、一心不乱で各機器の点検整備中の様子で、出港真近かである事を感じた。手旗信号で武運を祈ったが、返信のあろうはずも無かった。

私にこれが戦艦大和である事がわかったのは、昭和三十年代に偶然見た映画の中で、三田尻港に集結して戦艦特攻として帰らぬ出撃する旨の字幕が現れた時であった。合掌

◆松縄 登吉 (72歳)

十字砲火

戦場・軍隊 ●

イラワジ河を渡河する敵は、あり余る膨大な物量にもを言わせて、中部ビルマ平原地帯を空地一体となつてわが軍を一気に熾滅しようとして強圧を加えて来た。迎え撃つは青葉兵団の歴戦の古強者、自信満々たるわがあやめ部隊だ。汗とほこりにまみれて、軍服も靴もボロボロだが一戦ごとに語り合った戦友の姿はなく、戦死者の骨を拾ってやる間もないが、士気ますます盛んだ。悪運強く、よくぞ生きていたものだお互いに見交わす顔と顔にいつしかのびたヒゲ。ニッコリ笑つてしっかりと締める鉄カブト。夜になるとわが方の得意中の得意たる夜襲戦だ。各隊ごとに決死の斬込隊が編成されて、何回となく出てゆく。敵陣近くまで迫るとまず犬のけたたましい鳴き声に悩まされ、発見されると敵陣から照明弾が打ち上げられて、四辺は真昼間のように明るくなり同時に一斉に火を吹く敵十字砲火。しばし、騒音と銃砲弾に、夜空の星さえ見えなくなる。毎夜斬込隊が出されたので、さすがの敵も随分と悩まされたらしい。

タリンゴンは戸数六百戸ときくも相当ある部落で、敵は戦

車に守られて頑強に抵抗してなかなか落とせない。なんとしても撃破せんものと決死の攻撃をかけると、戦車に支援された正面の敵第一線陣地は突破出来ず、ついに敵前三、四百メートルの所にタコツボを掘り、すっかり擬装して夜を待つ。昼間は敵から一日中迫撃砲の盲撃だ。時々壕の付近に炸裂した破片が、ブンブンとうなりを立て壕の近くの草むらに落ちる。

日が落ちると共に行動開始だ。ジリジリと進んで行くとも早くも先兵が発見されたか犬の遠声とともに照明弾が打ち上げられ一斉に四方八方からの十字砲火。ありとあらゆる火器が火を吹き、実に物凄い。わが方も負けじと応戦する。彼我的十字砲に頭も上げられず前進も出来ず。夜空に美しい曳光弾のしま模様はわれを忘れて見とれるくらいだ。余りに激しい敵火にしばし地に伏しながら時の経つのを待つ。

前方より小声で「壕を掘れ」の口頭命令が伝えられ、円匙のある者はそれで、ない者は鉄帽をはずして掘るが、乾ききった大地は固くてまるでコンクリートのようなだ。これは大変

な土地だ。でもみんな無言で必死になって地に伏せたままの姿勢で掘り下げようとするが三センチも掘ることが出来ぬ。

ピツタリと伏せる以外に方法がない。「絶対に音と声を出さな」の厳命。敵はあり余る弾薬で容赦なく撃ってくる。よくまあ弾が尽きぬものだと感心する。と同時に余りにも少ないわが方に無性に腹が立ってくる。どうすることも出来ない。

あれだけ激しかった十字砲火もだんだん下火になり照明弾も消えて再び夜の闇に包まれた。南十字星はすでに薄く光って北斗七星は頭上に来ている。まごまごしていると夜が明けると。昼は敵の天下になる。そこから少し前進してタリンゴン部落の三、四百メートルの所に大急ぎでタコツボを掘る。さもないと今度は戦車装甲厚十センチに踏みつぶされる。運良く畑の土も割合に柔らかく必死に掘り終わって急ぎ擬装網を草で覆い上空から見分けがつかぬようにしたところ、東の空は明るくなり敵の偵察機が飛び始めた。夜が明けると敵は再び撃ってくる。これで敵が突撃して来たらまずはいチコロだがそんな心配はまずない。敵はわが軍の白兵戦の恐ろしさを知り過ぎてゐるからだ。

それにしても昼間の長いこと。せまい壕の中では窮屈で暑くて汗でびっしょりだ。うつらうつらしていると敵は盛んに拡声機で何かがなり立てている。「日本軍の兵隊さん夜襲攻撃を止めてください。われわれは昼間の戦闘で疲れていますから、夜はぐっすり眠りたいのです。日本軍の夜襲攻撃でおちおち眠れず困っていますから、今夜から夜間攻撃だけ

はやめてくださるよう」何度も呼びかけている。畜生。ムシのいいこと言いやがる。当方は昼間は一歩たりとも動けない。そう都合のよいように行くか。食うか、食われるかの激戦場だ。敵は繰り返し拡声機で放送し、終わると同時に一斉に火を吹く、火器の十字砲火の雨だ。よくまあ、みえすいた放送をしやがる。それにしてもいっぱい弾があるものだと感心させられ、しゃくにさわって仕方がない。

赤い夕日がヤシの葉陰に沈むころになると、あちこちの壕からはい出て活動を開始する。夜はわれらの天下だ。一晚、二夜夜襲を強行せるも、前面の敵陣地はびくともせず部落の入り口にも近づけないほど頑強に抵抗してタリンゴン部落は落ちない。三晩目の夜襲総攻撃は、あやめ部隊の名譽にかけても落とさなければならぬ。偽装隊が編成された。本隊は部落に向かつて左側へ迂回し夜中の二四時より発射する。三島の野戦重砲が最後の二十発目を撃ち終わると同時に、部落へ突入することになっていた。本隊が行動を起こすとあとに残った小銃隊は陣地があるように敵に思わせる偽装隊だ。その隊の一員となり、タコツボに入って前面のタリンゴ部落に注目しながら今夜の総攻撃を是非とも成功させたいと思う。やがてタリンゴン部落をめがけて一斉射撃の火ぶたを切った。

戦争は二度としてはならない。平和にまさるものはない。

◆松縄 登吉(72歳)

トングー鉄橋警備

戦場・軍隊 ●

中国雲南省竜陵県ニノ山攻撃で重傷を受けて、よくも死なずに北ビルマのミヨのジャングルの第二師団の兵站野戦病院を退院できた。重傷後、わずか三十日足らずで、一応元氣を取り戻し自分ながら悪運が強いのか、それとも生来頑健なのかと思う。若い時現役兵として北滿の広野で日夜鍛えられた体力と精神力か、いずれにしても奇跡的に助かる。天はわれにまだまだ戦闘せよと言うのか。生命の続く限り。白木の箱はもとより覚悟の上だ。夜中に通過するトラックを見つけてラシオ鉄道の基点まで行く。さらば北ビルマの地よ。幾多の大きな犠牲を払ったこの山岳に、この村に町にこのジャングルに、別れの手を振りながら見上げる夜空に北斗七星。

一週間以上もかかって原隊の警備するトングーへ。トングーは中部ビルマのマンガレーとツングーンの間中に位置する。戦友の待つ懐かしの原隊。中隊長はすでに代わって、今度は阿部栄一中尉。戦友たちは非常に喜んでくれた。特に刈谷正巳班長は「松縄や、よく生きていたな。あれだけの重傷を受け、もう二度と顔を見ることは出来ないと思っ

いたよ。元氣に帰ってくるとはな」と涙を流してくれた。だが、懐かしい戦友も何人が欠けていたのは実に寂しかった。まことに人の運命ほどわからないことはない。

とにかく、断作戦の整理と体力の回復と休養と、近づく次期作戦の準備を兼ねてトング地区警備に任じていた。すっかり雨期も明けて毎日朝からかんかん輝りつける熱帯の太陽は容赦なく、汗とほこりにまみれる。一滴の雨も降らず大地はからからに乾きあがり、まさに砂漠地帯だ。

周囲には大きなひび割れが出来ている。焼け付くような毎日。敵との戦闘よりまさに水との戦いになりそうだ。今までの山岳戦と違って見渡す限りの平野部。制空権は敵にあり。

また戦車との激烈な戦闘になるだろう。本隊のイラワジ河畔への出動に先立って、トングー鉄橋警備を命ぜられ、配属機関銃分隊長として警備に就くよう中隊長から下達された。一応、独立分隊長で名目が良いが。さて、その編成人員表を見たら分隊長はじめ負傷、全快して中隊に復帰した者はばかりだ。なんだこの編成員は。一番重責の鉄橋警備にはつきり

言つてロクな人員ではない。全員やられてもどうせ負傷のよくなつた連中ばかりだから元々なのか「機関銃は連隊本部にて受領せよ」の命で、直ちに連隊本部に行き、副官の野田大尉のもとで二銃受領。木箱をあけて驚いた。実に粗末で使用に耐えかねるような銃で部品が合わない。「副官殿、こんな重機で鉄橋を守るなど出来ません」と文句を言つたら「君の気持ちはよくわかるが現況ではすぐに間に合はず、なんとかがん張つて我慢してくれ。何分頼む」と頭を下げられ、次は、次の言葉が出ず。

二銃と弾薬を受領し、駅の近くにかかる鉄橋警備の任に就く。アラガン山脈が遙か彼方にあり、その麓に沿つて流れる川に自分たちの警備する鉄橋がある。イラワジ河の支流かもしれぬこんな小さい鉄橋も、何回となく敵に爆撃されているが、爆撃される度ごとにすぐレールを敷き、列車が通れるようにするので敵はやつきになつて爆撃を繰り返す。いたちごつこだ。敵はどんな小さい川の鉄橋でも見逃がさず爆撃だ。おかげで武器弾薬その他物資は前線に届かず困る。

鉄橋より百メートル位はなれたバナナ畑に天幕を張り畑のところ十メートル位にはなれて二銃をすえる。昼頃二機の偵察機がゴォーと通過する。それ撃てや。今度は駅を目標に敵戦闘機二機で撃っているのが目に映る。ヨォシ、これをねらつて撃つも敵もさるもの機の前頭からパッパッと火のふくのが良く見えるがなかなか当たらない。アッ、シマッター。逃がしてしまつたか。仕方ないと思ひながら今度はアラカン山

脈を背にゴォーとかすかな爆音。見上げる空の彼方に敵機の編隊飛行。数えたらノースアメリカ三十二機。あきらかにこの鉄橋が目標だ。高度約千メートルに水平爆撃だ。五百メートル位から目と耳を挿えて伏すと同時に、物凄い音と爆煙に辺り一面包まれて何物か見えず伏せている耳の近くでブルーンの音。そうと見回すと驚いたことに鉄道の重いレールが百メートル近くも吹き飛ばされて自分たちのすぐそばに半分以上もうまって先がブルブルとゆれていた。もちろん鉄橋など跡形もない。

二度と戦争はしてはならない

◆元島 源俊（75歳）

大東亜戦争に出征して

戦場・軍隊 ●

八月十五日が来るたびに、私はいつも過去の誤った日本の歴史を想起する。私自身もまた、単純な若者だったため、神国日本に生れた素晴らしい日本人であると思っていた。あの学徒出陣の時、若い感情を発露し、祖国愛に燃えて南方行の軍属に応募した。東京都麴町区代官町にあった東部軍司令部の陸軍軍属員である。そして、南方へ出征、ジャワ島、パ

ンドン市の部隊の炊事係になった。なにもわからずに、遂に終戦を迎えた。そして復員後、人生のあらゆる困難に直面しながら、これまた、私自身、七十五歳の高齢者となり何にも出来ないまま生涯を終わろうとする日々である。戦後も戦前においても、いろいろの事が山積しているが、私は人間としての感想等を述べる。たった一言、それは戦争は悲惨である。獣の世界だ。そして人間とは何かを生涯かけて一人一人が学ぶ必要を痛感する。

人間とは何か

それは不完全で弱い生きものであり、未知に閉ざされた生きものにすぎない。従って、幼少の頃の躰と、青少年の徹底

した教育と鍛練が必要と思う。それは、私たち不完全な大人たちにも必要と思う。なぜなら、いくら年を重ねても、悟り切れない人間の世界は、たえず矛盾と誤ちに満ちているからだ。そして、ほんとうの愛というものを失いつつある現代は、恐ろしい悲劇をくり返すからである。

自分の命を得ようとする者は、かえってそれを失い、自分の命をすてる者は、かえってそれを得るといふ聖書の教えは、自分を忘れてつねに人の立場になって物事を司さどる人は、かえって、神から素晴らしい命を与えられている事と、私は信じている。

素晴らしい命とは、気高い人間の姿でもあると思う。

◆森江 桂造（62歳）

ある少年兵の死

戦場・軍隊 ●

昭和十九年の秋でした。奈良航空隊で海軍飛行予科練習生として訓練に励んでいた私たちが、その日、陸戦訓練で疲れ切って、兵舎にもどってきた時、そこにいたS班長が、「きょうはつらかったのう。M練習生が死んだよ。彼の病室の枕元に自分で描いた飛行機の絵がいっぱいあってなあ。」とぼつんと言いました。Mにしばらく会っていない私たちは、思わず「えっ」といった後言葉がなかったのです。私は彼とは班が違い格別親しかったわけではありません。でも入隊が昭和十九年四月一日で、中学三年修了で入隊した同期であったこと。そして一番年が若いのに誰よりも、ズバ抜けて航空機に詳しく、日本の機種についてはもちろん、外国の航空機の特徴や性能についてもそらんじていたことで、隊の中でもよく知られていた一人でした。

私たちは四月に入隊して、三ヶ月目に、あらためて航空兵としての適性検査を受け、操縦組と偵察組に編成し直されました。

操縦組はさらに、水操組と陸操組に分けられたのです。水

操というのは主として艦載機の操縦に適性であり、陸操組は陸上基地向の操縦者として適性と認められたものです。志願したもののすべては、少しでも早く自分で飛行機に乗って操縦したいという夢を持っていました。それが私たち少年の憧れであったのです。水操組はエリートと見られた形ですから、水操組に選ばれたMの喜びは格別でした。飛びあがって喜んでいた彼の姿が眼に残っています。偵察組の中には、操縦組の者たちの喜びとは反対に、くやしくて涙を流したり、「なぜ操縦に不適格か」と班長や分隊長に食いきがって理由をたずねている者もありました。多くの友人は、Mが水操に適格となったことに、「やっぱり」と予想通りに思ったようです。運動能力も体力も劣る私は、「偵察でも飛行機には乗れるのだから」とやむなく自分を慰めたのです。それ以後、隊が編成替えとなり、Mと分かれてから姿を見なくなりました。

しばらくして、うわさで、Mが病室に入ったと聞きました。病気が結核ということで、同じ班員も病気見舞に訪ねる

こともできなかつたようです。激しい訓練で休養や栄養が不足し、急速に病気が進行して倒れたのです。

「国に尽くすことのために、大好きな飛行機に乗れる。」という思いの何よりも強かつた彼の死に、私たちは「できることならせめて飛行機に乗せて敵艦に突撃させてやりたかつた」と話しあつたものです。

彼の枕元に自分で描いた飛行機の絵があつたという班長のことばは、飛行機に乗りたいという思いを、果たせなかつた彼の無念さが私には強くひびきました。

彼の死のあと、私は他の班員と奈良から宝塚海軍航空隊に転隊となりました。移動して間もない一月、私は肺炎に倒れました。高熱が五日間続く危険な状態をどうやら越えて、一ヶ月半後病室から隊に復帰することができました。

入隊当時、六十キロあつた体重が四十キロに落ちていました。その後体力は少しずつ戻ってきましたが、厳しい訓練にはかなりきつい思いをしました。

三月半ば過ぎ、突然に練習生全員が放送により講堂に集められ、航空隊司令からの訓辞と通達を受けたのです。その要旨は、戦局は極めて重大な局面を迎えていること、お前たちは航空兵としての訓練を受けてきたが、ここに戦局を切り開くために、特种兵器搭乗員募集の命が下りました。国に尽くす道に変わりはない。募集に異議のあるものは申し出でよ、無ければ、これより各分隊ごとに要員の選考に入る、といったことでした。

特种兵器ということが特攻兵器であり、飛行機ではないことはわかつたのですが、どのような兵器かは知らされなかつたのです。戦いが本土決戦近かにあることを覚悟して、全員がこの募集に応募したのです。

後で分つたその兵器は、潜航艇のようでした。当日午後、私たちの分隊から五五名が選ばれ、即日五日間の休暇を与えられ故郷に帰っていきました。そして五日後の夕方、彼等は私たちの別れの帽を振る中、任地に赴いていきました。そして、五月、再度の募集があり、そのあと残つた隊員は、最初の隊員の五分の一以下であつたように思います。

飛行機に乗る夢もなくなり、特攻要員からはずされた私は、他の隊員と本土決戦のための訓練と、空襲後の大阪市街の焼跡や工場の整理や壕掘りに従事して、終戦を迎えたのです。飛行機にのりたい思いを残しながら死んだMと同じような夢を持った多くの友だちが、特攻要員として旅立ちました。

四十五年経て、人名も時期も記憶の中に薄れています。でも復員して生家の焼跡に立つて以来、亡くなったMの無念さとどぶつて、戦争の無惨さ、虚しさは私の胸から消えることはありません。

◆吉村 正太郎 (75歳) 北支戦線点描

戦場・軍隊

私は一九一五年(大正四年)にあの温顔の鎌倉長谷大仏の近くで生れたので現在七十五歳である。三十七歳の時に慶応三年生れの父が死んだので東京都から青山霊園を二坪借りて粗末な墓を造り、近くの西麻布に小宅を構え以来三十七年間住んでいるので、ちょうど鎌倉と西麻布に半々住んだことになる。

西銀座七丁目にあった電通本社の出版部に勤めていた二十五歳の時に第一補充兵であった私に赤紙(召集令状)が来た。当時鎌倉近在では有力者の子弟は近衛連隊へ、一般の者は甲府の四九連隊へ入隊するのが普通で、もちろん私は後者の部類であった。富士の裾野の滝ヶ原練兵場で三ヶ月間の速成新兵教育を受けて、われわれ二百五十名が行先不明の戦地に向けて出発したのは十二月初旬であった。

輸送列車で最初に下車した所は宇品港で、乗船して翌日釜山港に上陸、それから貨車で京城、新義州、鴨緑江を渡り、安東、奉天、山海関を経て北支に入り、德州で下車して宿営地に入った。一週間ばかりの滞在中にわれわれの配属が決ま

り、私は数名の同僚と共に北支派遣軍木村部隊伊集院部隊山口隊という重機関銃中隊の配属となり、トラックで砂漠地帯を轟々たる砂塵をあげながら駐屯地へ向かった。山東省思泉という、東西南北に城門があり、その間を土塀が築かれている中国の平均的な小都市であった。

山口中隊は山口中尉以下、小隊長に少尉が二人、准尉一、曹長一、軍曹三、伍長三、古参上等兵、一等兵とわれわれ補充兵を加えて三十数名と軍馬が五頭という編成で、その他に平時は城門の出入を警備する原地人の保安隊が三十名ほど管理下にいた。

当時の北支派遣軍木村部隊伊集院部隊の任務は徐州陥落後の山東、山西、河北省の治安維持と抗日戦に蠢動する八路軍の掃蕩作戦が重点で二ヶ月間にわたる冀南作戦もその一つであった。七月七日の支那事変勃発記念日の夜のことであった。真夜中の頃突如として八路軍の夜襲が展開され同時にわが軍の集結していた輸送用トラック十数台が炎上、宿営地は完全消灯が命ぜられ、味方は空に向けて威嚇射撃をして応戦

せざるを得なかった。協同作戦中の保安隊と八路军を区別するための合言葉も決められていたが、暗闇の中、叫喚と銃砲の爆音で数時間にわたって生地獄の恐怖が部落を覆った。やがて夜が白みだすと敵はゲリラ戦を打ちきって計画通りというか遁走してしまっ

た。その後われわれの中隊は恩県から臨沂へ移動したが、ここが八路军の山東省の本拠地で毎晩のように敵の夜襲があり、追うと逃げてしまうが、また翌晩も夜襲をかけてくるという始末であった。その頃、伊集院部隊長が蓮花部隊長に交替する人事異動があり、復員説がちらほら聞かれる補充兵仲間は情況は悪いし、お寺さんから蓮花では縁起がなおのこと悪いとささやかれたものだ。

私は中隊に配属されると功債係、人事係、情報係、助手と事務室勤務が続いたが、ある日、中隊の主力が討伐に出動したため初めて上等兵として衛兵司令をやらされた。その日、二年兵、一等兵の炊事当番のAが材料仕入れで公用外出し、東門から警備の保安隊を騙して支那馬（チャンバ）に乗って脱走する事件が起こった。憲兵隊の調査結果は、彼は中国人宅を襲い衣服を奪って変装して逃亡したということだった。

この件はわれわれが臨沂で復員が内定した頃、事件から六ヶ月以上経過していたが、Aは塘沽（タク）港から船員に化けて輸送船で日本に舞い戻り渋谷の親戚に立ちまわったところを憲兵に逮捕されたということであった。敵前逃亡で死刑になったかどうかの詳細はわからぬままである。

北支派遣軍木村部隊長は陸軍大将で木村兵太郎氏であった。彼は連合軍の東京裁判でA級犯罪人として絞首刑になった東条英機以下七名中の一人であった。彼のお墓が私の家から数分の所にある青山霊園の一部である立山墓地に在ることを私は散歩のおり発見した。「元陸軍大将 木村兵太郎／昭和二十三年十二月二十三日／極東軍事裁判に依り刑死」その墓前に立って私は一年半従軍した北支戦線を想うと共に平和と人道の名において行われた東京裁判は、勝者が敗者を一方的に鞭打った不合理な裁きではなかったのではないかと思うと同時に、戦争は二度と繰り返してはならないと心底から願った。

◆米山 栄策（79歳）

三十三歳の一等兵

戦場・軍隊 ●

昭和天皇逝き戦後四十五年平成二年八月十五日の終戦記念日を迎えようとする時、東京の街にも戦争戦災の生証人がだんだんいなくなってきた。私は私なりに戦前戦中記憶の限りつづっておきたかった。

戦中は申すに及ばず挙国一致天皇のために一身を報ずるの、一貫された水も漏らさぬ統制下に召集令状を受けたのが、昭和十九年三月十日。仕事は当時牛乳販売業をやりながら平塚海軍指定工場を新潟に二工場、群馬県下に一工場を持っていたが、召集となればすべてを投げ打って即応しなければならぬ。新橋六丁目塩釜神社に整列した。その日の応召者は五名。

町の人達の日丸の旗に送られ、万歳の声を聞きながら立ったのが三月九日、さらに新潟県の田舎に帰り、ここでふるさとの人達からもまた指定工場の工員達に送られて帝国海軍航空隊の整備兵として故郷を立ったのが翌日十日午前中であった。そのまま舞鶴軍港へと車中の人となった。年は三十三歳。働き盛り、体は健康、「ようしやれるだけやるぞ」と心

に誓った。その時家族は妻と男一人女三人の子供がいた。子供達も妻と一緒に日丸を振って前に立って送ってくれたのがうれしかった。入団応召兵のうちで私は年長の方であった。検問も皆と一緒に受けて一人前の兵である。それから六ヶ月新兵教育の毎日である。三八式の銃の操作から飛行機整備に必要な海軍用語。これはすべて英語であった。日本が英国の海軍の式法を受けついだ故であろう。整備に使う道具の名称も皆英語であった。新兵教育中すべてを飲み込むのは至難なことで次から次へと一通りは一度は教えられるのである。

この新兵教育が終わると召集された一同は一期兵進級として一等水兵になる。同時に配置が決まる。配置は鳥取県三保航空隊で海軍練習機の搭乗員養成の九三式機種で、その整備兵である。それも同年兵がみな一緒ではない。それぞれに分かれて配置されるので同年兵に別れる始まりである。三保の航空隊に移る。すぐさま初年兵教育の教育班長の助手として配置された。初年兵は海軍の水兵で、召集で入隊したばかり

で昨日までの自分の姿であった。

三保航空隊の中にて水兵の召集兵教育所が新設された訳で、二三部隊、二四部隊を合せて六百人の新入隊兵に、十二名の教官に三人の教官助手がた。私は三人の助手の内の一である。二人の助手はすでに実戦済みの海軍上等水兵で外地に一年、しかも帰路の航路で爆撃を受け洋上で一昼夜浮遊物につかまって助けられたと言うチャキチャキの志願上等水兵であった。年は二人共に十九歳。私より十三歳も若い上等水兵であった。教官達も全員が実戦経験の志願にて入隊した一等兵曹で一人、二三、二四の分隊長が上等兵曹であった。私は六ヶ月新兵教育を終ったばかり、それにもとづき上官の命令、二人の助手上等水兵の命ずるまま動いた。何のことはない家において牛乳配達よりは楽で、自分で自分の体をもて余ほどである。しかしこれも軍規と、じつと役目を果していた。その頃から戦況は必ずしも日本に有利でない様子が教官達の対話の中で読み取ることができた。教育する新兵は水兵で、助手の一等水兵の私とは親しく話が出た。いよいよ六ヶ月の教程期間が終わる我々と同様、各々に配置されてその部隊は解散された。私も同時に配置が変わった。命令のまま汽車に乗った。どこへ行くかは兵には教えない。

着いたところは九州の鹿屋飛行場で、実戦部隊の三〇五零式戦闘機の特攻隊の整備であった。着いたその日から特攻機十六機が発進した。特攻機は夜のうちにテントで灯りが外に漏れぬようにして整備され、明け方列線に並んで特攻機は発

進する。二度と帰って来ない特攻機である。五十番と言う五百キロの爆弾を腹部に付けてそのまま敵艦に体当りをする。

いわゆる「俺と貴様は同期の桜」の特別攻撃隊の飛行機の整備兵である。班毎に二機の零戦機を受け持ち一班に班長以下三十名ぐらいて一等水兵十名、上等水兵十名、兵長五名、二等兵曹三名、一等兵曹二名、上等兵曹一名の組織で、私は一等水兵最新兵であったが、年は私が最古老で、外全員が志願で入隊した台湾、朝鮮の一等水兵同士。だが私より三、四ヶ月早く年も十五歳ぐらいの人が多かった。上等水兵にも十五、六歳の志願兵が多かった。軍隊は絶対に階級制度で、私が応召の最下位の一等兵であった。

特攻機は三日置きぐらいに攻撃した。朝薄暗いうちに列線に並んだ零戦機は、十機から十五、六機。両側に整備兵が並んで送った。この頃が沖繩戦、台湾戦の頃であったことは後でわかった。なお一等水兵が出撃の飛行機の「最後のチョコ取り」と言うが、車輪止めを搭乗員の拳手により、取り除く役を機の両側に立ってその都度やった。搭乗員はほとんど学徒であった。出撃後三十分以内に敵艦に向かって自爆するのである。この若い搭乗員の顔は余りにも冷静で澄んでいたことを今でも記憶にはつきり映ってくる。

「尽忠報国天皇陛下」のため、生を受けしと純粋な学徒をそのまま自爆という熾烈な死に追いやったあの当時を思うと涙せずにいられない。こうした日々が一月から八月十五日まで続いた。しかも八月十五日の朝一〇機の特攻機の発進がま

さまざと浮かぶ。その翌日、総員集合で司令官が「戦争は終った」と告げられただけだった。その後、整備部隊は船で四国観音寺飛行場に送られた。そこに一ヶ月、何もせずいた。しかし一等水兵は何時でも忙しかった。そして九月二十二日四国において自由解散。独自で家に帰れの命令であった。私は嬉しかった。戦争が終わったのだ、解放されたのだと四国の観音寺の小山に立って戦友と抱き合って喜んだ。その時四国の空は秋晴れに澄み切っていた。帰還。四国の港まで歩いた。乗船して内地に着いた。汽車に乗り替える。帰還兵で列車は超満員、列車のつなぎ目に立ったまま妻子の疎開している新潟に向かった。夕方、新潟県南魚沼郡六日町に着いた。妻は突然の帰還に驚いた。工場の工員達も驚いたり、喜んだり、その夜は命もうけの会で酒をくみ交わした。しかし、田舎でも戦争の戦死者が多く、浮かれた気にはなれなかった。

終戦、それは敗戦であった。東京空襲三十万人の死者。広島原爆投下、十万人の死者。続いて長崎投下、七万の死者。沖縄空襲決戦等、帰還してから知った事実であった。

さて、それから四十五年、平成二年八月十五日を迎えるに当たり、これからの日本を一言書きそえておきたい。

侵略戦争、そして敗戦。決して聖戦でなかった。この事實は私拭わす出来ない。しかし、新たな憲法制定後、天皇陛下もこの線で協力、国民と共に協力したので今日の日本に復興できたのである。敗戦で何の混乱のなかったことも陛下の尽力

が大いにあったからだ。しかし、隣国諸国にご迷惑をおかけしたことは誠に遺憾。その点日本は、謙讓さが欠けている。被害者は決して忘れていけない。日本国民は、これから百年かけても被害者の心をいやすべく、忍耐強く、努力を忘れてはならないであろう。これは官民共に心一つにして務める未来の義務である。

